

末摘花 森野かずみ



ベニバナ (末摘花)

今月5日は二十四節気の「芒種(ぼうしゆ)」で、21日は「夏至」です。芒種は、芒(のぎ)のある穀物(主にイネ科)の種をまく時期とされています。夏至は一年で最も昼が長く、夜が短い日なので、夜8時から10時まで照明を消すキャンドルナイトなどを楽しんでみてはいかがでしょう。

さて、タイトルの末摘花(すえつむはな)とは、万葉時代には「呉の藍(くれのあい、中国伝来の染料)」と呼ばれたベニバナ(キク科ベニバナ属)の雅称で、末摘花は茎の先端、すなわち「末に咲いた花を摘む植物」という意味です。ベニバナは高さ1メートルほどに成長し、枝分かれした茎の先に管状花(かんじょうか)と呼ばれる鮮やかな黄色でアザミに似た花を付けます。

花の黄色は、咲いてから時間が経つと徐々に赤くなります。花を摘み取って水の中で揉むと黄色い色素が溶け出して、水に溶けない赤い色素が残ります。これを発酵させて、煎餅状に潰したのが「紅餅(べにもち)」で、染色の原料になります。紅餅をアルカリ性の灰汁(あく)に溶かし、酸性の水で沈殿させることを繰り返すと、赤い色素だけを純粋に取り出すことができます。これが「紅」で、主に食品の色付けや化粧品などに利用されてきました。

葉の周囲は鋭くがつつて、触ると痛いところもアザミに似ていますが、茎や葉はアザミよりも硬く、干して乾燥させるとドライフラワーとしても楽しめます。ベニバナの原産地は諸説あるようですが、インドやエジプト、エチオピアやアフガニスタンなどと言われています。

日が延びた分ゆつくりと、家庭菜園や花壇の散歩をお続けください。

※Kaceeのホームページでカラー写真をご覧いただけます。